

ミシガンの思い出

医学部・歯学部附属病院 泌尿器科

岡 夏生 おか なつお



2003年4月から2005年3月までの約2年間、文部科学省在外研究員として、ミシガン州デトロイトにあるKarmanos Cancer Instituteで研究を行いました。デトロイトといえば“自動車の町”のイメージがありますが、実に米国自動車産業界のビッグスリーであるGM、フォード、クライスラーのホームタウンになっており、米国でも重要な工業都市の一つです。し

かし、1960年代後半の公民権運動の激化による暴動、70年代からの自動車業界の不況のあおりを受け、町からどんどんと人が離れていきダウントウンは荒廃してしまいました。実際に町を見てみても、過去の繁栄を物語る古くて重厚なビルがあるかとおもえば、一方で落書きされた空きビル、空き地なども多くみられ、閑散としています。私の所属していたラボは研究所では大きな部類に入り、イスラエル出身のボスであるDr. Avraham Razが主宰しています。彼は癌細胞におけるgalactoside-binding proteinであるガレクチンの発現、また転移過程でのhomotypic aggregationやtumor embolismにおけるガレクチンの役割を最初に証明した人物で、AMF (Autocrine Motility Factor)に関する研究の分野でも有名です。彼は大物の風格が漂う一方、大変気さくで陽気な方で、自由に楽しく研究をさせていただきました。私のアパートメントは、俗に‘メトロ・デトロイト’と呼ばれる治安の良い郊外にあり、片道約30マイルの道のりを通勤していました。都市部と違ってたいへん緑が多く、渡米当時は土地の広大さ、自然の豊富さに本当にびっくりしたものです。住んでいるアパートメントの敷地内は一面芝生におおわれており、リスやカナディアングースをよく見かけました。敷地内を一周するだけでもたいへんな距離で、森林あり池ありとまるで大きな公園を散歩しているようでした。当然、ゴルフ場やスキー場も豊富で日本よりもはるかに安い費用で楽しむことができます。サマータイムの期間になると、仕事が終わりと、さあ遊びだとはばかり、夕方からいそいそとレジャーに向かい暗くなるまで楽しむというのが米国流で

す。日本でもサマータイムの導入の是非が議論されていますが、どうなることやら…。

今や米国留学は珍しくない時代ではありますが、やはり異国の地でいろんな国からの研究者と共に切磋琢磨しながら研究をするというのは、なかなか良いものです。日常生活、英会話も含めて苦勞することも多いですが、一方では日本では絶対に味わえない楽しいことに出会うこともたくさんあります。家族にとっても生涯忘れることの出来ないかけがえのない経験となるのではないのでしょうか。どうしようかなと迷っている方には、ぜひ前向きに検討することをおすすめします。最後になりましたが、今回このような貴重な機会を与えてくださいました香川征教授（現病院長）に厚く御礼申し上げます。

